

箱崎 57

— 箱崎遺跡第82次調査報告 —

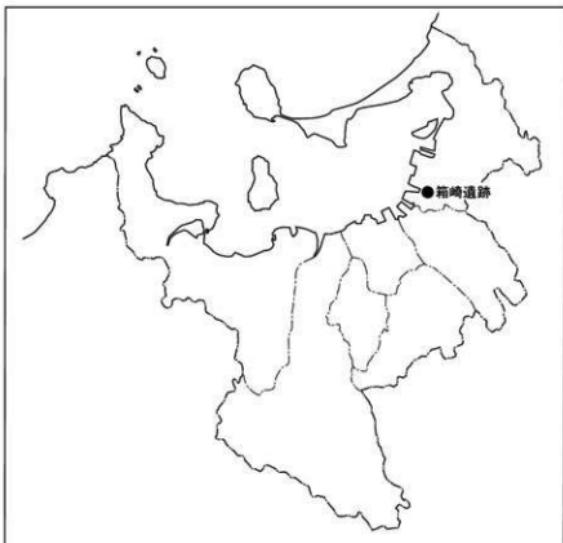
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1372集

2019

福岡市教育委員会

箱崎 57

—箱崎遺跡第82次調査報告—



遺跡番号 HKZ-82

調査番号 1645

2019

福岡市教育委員会

序

現在、アジアにより一層開かれた活力のある国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。本市ではこの交流を物語る文化財の保護に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、平成28・29年度に東区箱崎1丁目地内において実施した、箱崎遺跡第82次調査の成果を報告するものです。本調査では、中世の遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元するうえで多大な成果を上げることができました。本書を文化財保護や学術研究をはじめ、文化活動、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、事業主体者様をはじめとする多くの関係者の皆様にご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子明夫

例　言

1. 本書は福岡市東区箱崎1丁目2469番における店舗兼専用住宅建設に先立ち、福岡市文化財部埋蔵文化財課が平成29年3月1日から平成29年5月16日にかけて発掘調査を実施した箱崎遺跡第82次調査の報告である。
2. 検出した遺構は、土坑をSK、ピットをSP、井戸をSE、性格不明の遺構をSXと略号化して記述した。
3. 方位は国土座標（世界測地系）による座標北である。また、本報告書記載の国土座標はすべてII系の数値である。
4. 本書に掲載した遺構の実測、写真撮影、製図は担当の服部瑞輝、加藤隆也が行った。
5. 本書に掲載した遺物の実測は服部、熊塙御堂和香子が、拓本は鈴木諒子、中村祐子が行った。製図および写真撮影は服部が行った。
6. 金属製品については、保存処理を福岡市埋蔵文化財センターの松園菜穂が行った。
7. 本書の執筆、編集は服部が行った。
8. 本書に掲載する遺物の分類に関しては、以下の文献を参照した。
山本信夫1990「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論集刊行会
郡司勇夫編1981『日本貨幣図鑑』東洋経済新報社
- 太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集
9. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡名	箱崎遺跡	調査次数	82次	調査略号	HKZ-82
調査番号	1645	分布地図 図幅名	34 箱崎	事前審査番号	28-2-236
申請面積	393.43m ²	調査対象面積	280m ²	調査面積	164m ²
調査期間	平成29(2017)年3月1日～平成29(2017)年5月16日				
調査地	福岡市東区箱崎1丁目2469番				

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II	遺跡の立地と地理的・歴史的環境	2
III	発掘調査の記録	5
1.	調査の概要	5
2.	遺構と遺物	6
IV	まとめ	24

挿図目次

第1図	箱崎遺跡及び周辺遺跡分布図(1/50000)	2
第2図	箱崎遺跡の各調査地点および標高推定ライン(1/6000)	3
第3図	第82次調査地点図(1/1000)	4
第4図	第82次調査区全体図・南壁土層図(1/100)	
第5図	SK0001・0002及び出土遺物(遺構は1/40、遺物は1/3)	6
第6図	SK0003・0007・0012及び出土遺物(遺構は1/40、遺物は1が1/2、2~3が1/3)	7
第7図	SK0021及び出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/3)	8
第8図	SK0055(1/20)	9
第9図	SE0107及び出土遺物(遺構は1/40、遺物は1/3)	10
第10図	SK0141及び出土遺物(遺構は1/40、遺物は1/3)	11
第11図	SK0140・SP0146・SK0147及び出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/2)	12
第12図	SK0148及び出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/3)	13
第13図	SK0159及び出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/3)	14
第14図	SK0213・SP0215及びSP0215出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/3)	15
第15図	SK0213出土遺物①(1/3)	16
第16図	SK0213出土遺物②(1/3)	17
第17図	SK0214及び出土遺物①(遺構は1/20、遺物は1/3)	18
第18図	SK0214出土遺物②及びSX0216出土遺物(1・6~11は1/3、2~5は1/2)	19
第19図	SX0217及びSX0217(1~4)、SE0248(5~9)、SX0249(10)出土遺物 (遺構は1/40、 1・3・5・6は1/3、2・4・7~10は1/2)	21
第20図	その他の出土遺物実測図①(1~9は1/3、10~15は1/2)	23
第21図	その他の出土遺物実測図②(1~2は1/2、3は縮尺任意)	24

図版目次

図版 1 1 SK0001南北半裁断面(西から)

2 SK0002(南から)

3 SK0007(北から)

4 SK0021(南から)

5 SK0055(北から)

6 SE0107(南西から)

7 1 区全景(西から)

8 SK0140(北西から)

図版 2 1 SP0146(東から)

2 SK0147(北東から)

3 SK0148(東から)

4 2 区全景(東から)

5 SK0213(西から)

6 SK0214(3 区側)(南から)

7 3 区全景(東から)

8 SK0002出土青磁(第5図-5)

図版 3 1 SK0021出土瓦器碗(第7図-15)

2 SE0107出土白磁合子蓋(第9図-5)

3 SK0214出土墨書き入り白磁(第17図-8)

4 SK0214出土墨書き入り白磁(第17図-9)

図版 4 1 SK0214出土滑石製石鍋片(第18図-6)

2 SX0217出土不明石製品(第19図-3)

3 SE0248出土墨書き入り土師器片(第19図-7)

4 SE0248出土石製硯(第19図-8)

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市東区箱崎一丁目2469番における店舗兼専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成28年6月22日付で受理した。

これを受けた埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に所在しており、試掘調査によって現地表面下140cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成29年2月23日付で事業主である個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年3月1日から発掘調査を、翌平成30年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成28・29年度、資料整理：平成30年度）

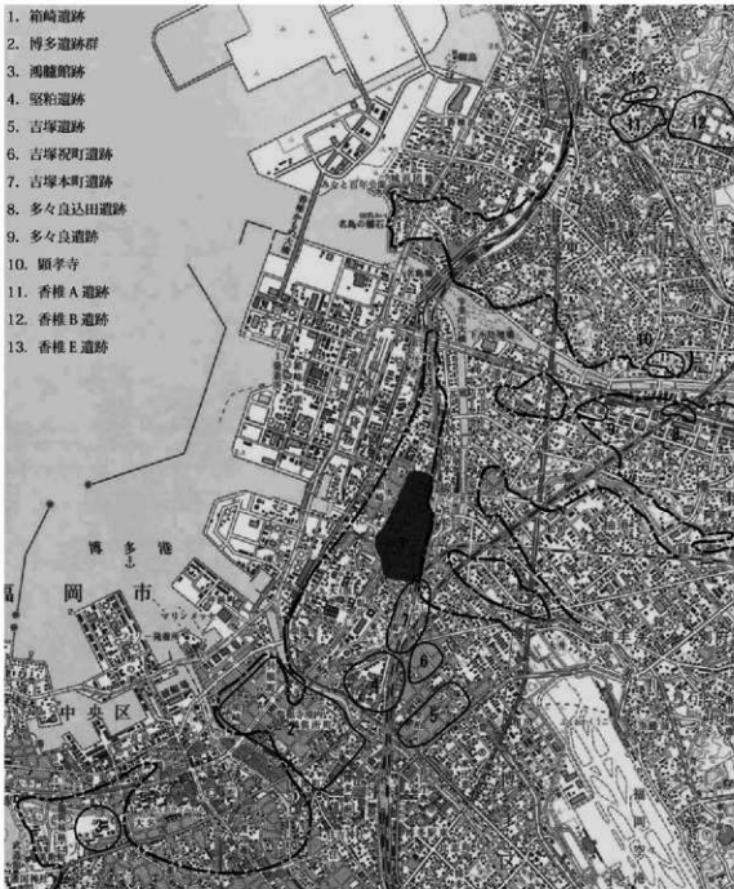
調査総括：	文化財部埋蔵文化財課	課長	常松幹雄（28・29年度）
	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	大庭康時（30年度）
	同課調査第2係	係長	加藤隆也（28年度）
			大塚紀宜（29・30年度）
庶務：	文化財保護課管理調整係		松原加奈枝（28・29年度）
	文化財活用課管理調整係		松尾智仁（30年度）
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係	係長	佐藤一郎（28年度）
			本田浩二郎（29・30年度）
	主任文化財主事	池田祐司（28・29年度）	
		田上勇一郎（30年度）	
	文化財主事	大森真衣子（28年度）	
		中尾祐太（29・30年度）	
		朝岡俊也（30年度）	
調査担当：	埋蔵文化財課調査第2係	文化財主事	服部瑞輝（28・29・30年度）
		主任文化財主事	加藤隆也（29年度）

発掘作業：内野信代 小野千佳 香月隆 高武奈美 古賀幸子 神藤輝美 高手興志子 豊丸秀仁
野口リウ子 花田昌代 増田ゆかり

整理補助：熊埜御堂和香子

整理作業：鈴木諒子 中村祐子

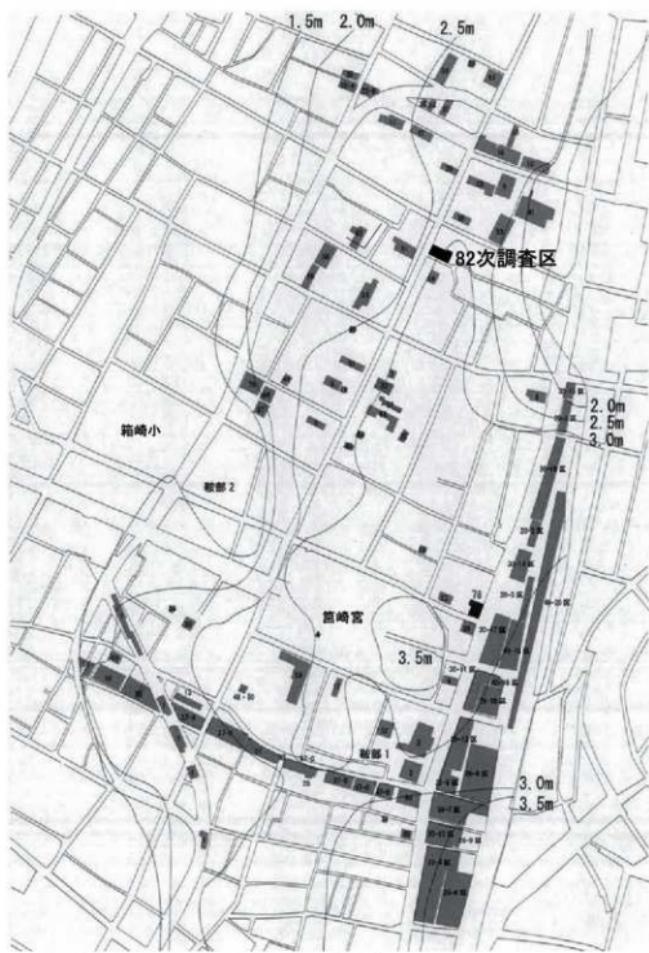
1. 箱崎遺跡
2. 博多道路群
3. 沖龍跡跡
4. 堅船跡跡
5. 吉塚遺跡
6. 吉塚祝町遺跡
7. 吉塚本町遺跡
8. 多々良込田遺跡
9. 多々良遺跡
10. 頤孝寺
11. 香椎 A 遺跡
12. 香椎 B 遺跡
13. 香椎 E 遺跡



第1図 箱崎遺跡及び周辺遺跡分布図(1/50000)(中尾2017を引用。図上一点鎖線は推定旧海岸線)

II 遺跡の立地と地理的・歴史的環境

箱崎遺跡は博多湾岸に形成された箱崎砂層と呼ばれる古砂丘上に立地する。この古砂丘は鞍部や旧河川などに分断されつつ微高地を形成しており、箱崎遺跡は現在の東区箱崎～馬出にかけての南北1000m以上、東西約500mの範囲に展開する。本遺跡から南に続く砂丘上には吉塚遺跡や堅船遺跡、博多遺跡群などがある。古砂丘形成時期は自然科学的におそくとも縄文時代晩期までには形成されたと考えられている。遺跡周辺の地形は現在と比較して、地形が大きく異なっており、現在の宇美川の河口付近まで入り江が大きく湾入していたと推定されている。これにより遺跡周辺は半島状の地形をな



第2図 箱崎遺跡の各調査地点および標高推定ライン(1/6000)(中尾2018を一部改変)

していたと考えられているが、この旧地形は箱崎遺跡の出現、発展に大きく寄与したものと推定されている。

箱崎遺跡の旧地形については、これまでに実施された発掘調査および確認調査で明らかになった砂丘面のレベルから、榎本義嗣氏によって推定されている。第2図の等高線は榎本氏の推定を参考に、近年の確認調査・発掘調査の成果から中尾祐太氏によって加筆・修正されたものである。

本遺跡における本格的な集落の形成期については、丘陵東側の緩斜面に位置する調査地点で古墳時代の住居や墳墓が確認されている。古代には「箱(篠)崎津」という港が砂丘後背部の多々良川水系で



第3図 第82次調査地点図(1/1000)

ある宇美川に面していたと考えられる。箱崎遺跡の遺構、遺物が増加するのは筥崎宮が創建（923年）された10世紀以降である。10世紀～11世紀前半にかけての遺構は筥崎宮の南東側に集中しており、越州窯青磁や石帯、瓦などの遺物が出土するといった官的な性格をもつ。10世紀後半になると生活遺構である井戸が検出されるようになるなど、11世紀前半にかけて生活遺構が増加する。11世紀後半～12世紀前半にはそれまでの生活域を継続しつつ、遺跡東側緩斜面を中心として遺構範囲が拡大する。この時期墨書き白磁を含む白磁や高麗青磁が一定数出土しており、楠葉型瓦器碗等に代表される畿内系土器も出土することから、国内外からの貿易や人の移動が盛んであったことが考えられる。12世紀中頃～13世紀は遺跡のはば全域、南北1km、東西350mの範囲で遺構が確認されるようになる。輸入陶磁器の出土も増加しており、人口の集中をうかがうことができる。この他、遺跡の北側に位置する10次調査地点や38次調査地点では、鋳型や羽口、ガラス壇塚などの生産関連遺物が出土している。以降14世紀初頭頃まで遺跡のはば全域に遺構の広がりが確認されている。13世紀後半においては、砂丘北西側緩斜面上およそ南北300m、東西100mの範囲で焼土層が広がっている。これは1274年文永の役における元軍の兵火により、筥崎宮社殿が焼失したことをうかがわせるものである。

【参考文献】

- 榎本義嗣編2002『箱崎13～箱崎遺跡第21次調査報告～』福岡市埋蔵文化財調査報告書第705集 福岡市教育委員会
- 佐藤一郎2013「箱崎遺跡－古代末から中世にかけて」『新修福岡市史－特別編 自然と道路からみた福岡の歴史』福岡市史編集委員会
- 中尾祐太編2017『箱崎50～箱崎遺跡第74次・75次調査報告～』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1317集 福岡市教育委員会
- 中尾祐太2018「考古学からみた箱崎と博多湾」『九州史学』第180号 九州史学研究会



III 発掘調査の記録

1. 調査の概要

箱崎遺跡第82次調査区は現在の箱崎宮敷地より北側約500m、主要地方道福岡・野方線沿い東側に所在する。箱崎遺跡の範囲のなかでは北寄りの砂丘北西側に位置しており、約50m西に第21次調査区、約50m南に第14次調査区、約100m南西に第24次調査区が位置している。近隣の21次・24次調査区では前章でも述べた13世紀後半の焼土層が確認されており、この層からは土坑、柱穴(24次)、溝(24次)、井戸(21次)、木棺墓(24次)を検出、その下層は地山となる砂丘面で、掘立柱建物(21次)、土坑、井戸、溝(21次)、木棺墓(21次)、埋葬墓(21次)が確認されている。

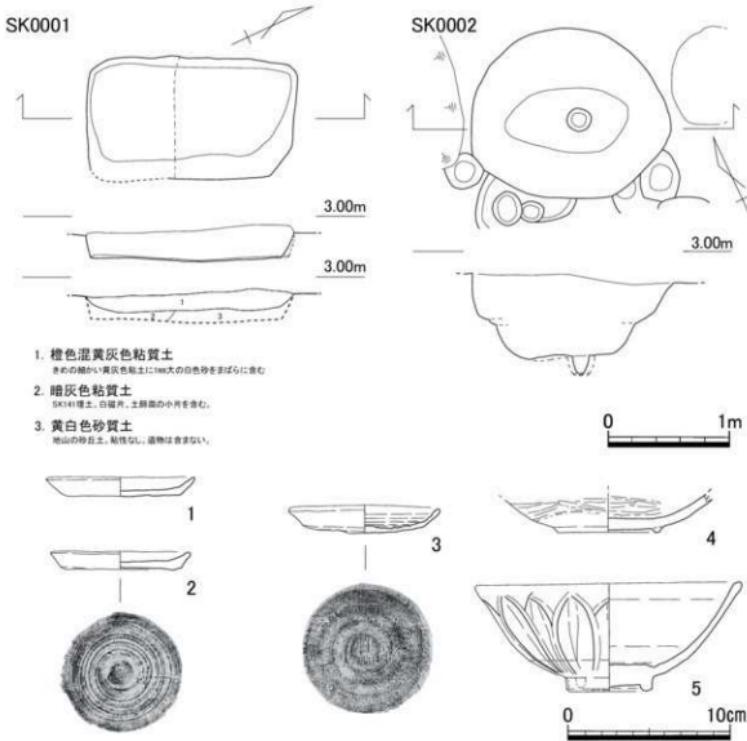
事前の試掘調査から地表140cm下で遺構面を確認しており、発掘調査は、予定建造物の地下への影響が及ぶ280m²を対象としていた。ただし本調査区は調査区一帯が粘性の少ない砂地であることに加え、北側・東側を民家建物、南側を車道にはば密着して隣接しており、かつ周囲の土留め工事は行われなかつたため、周囲崩落防止の法面を設定する必要があった。そのため、実際の調査面積は164m²となつていて、調査は廃土の置き場を確保するため、調査区を3か所に分け、調査順に調査した区画をI区、II区、III区と呼称した。区分けの位置は第4図を参照されたい。

I区は調査区の東側より約60mの区画である。平成29年3月1～4日に表土除去。地表より140cm下の暗茶褐色砂層からピット・円形土坑・井戸を検出した。さらに0～10cm下に砂丘地山である黄白色の砂質土（しまり粘性は皆無）を検出し、この地山面からもわずかながらピット・不定形土坑を検出している。掘削のち3月16日にI区の全景写真、のち個別写真・図面の記録作業を行なった。4月3日に調査区南壁沿いの砂丘地山を50cm程度掘削したところ、以下に全く遺物を含まないことを確認した。そのため4月4日に埋め戻しを行ない、I区の調査を完了した。

II区は調査区北西約50mの区画である。平成29年4月4～5日に表土除去。この区画は特に削平著しく、160～170cm下まで近現代の井戸またはその掘り込みによる削平を受けていたが、上端を削られたピット・土坑などが残存していた。北西側では厚み0～10cm程度の暗茶褐色砂質土が残存しており、ピット・椭円土坑を検出している。その下の地山である黄白色の砂丘土でピット・椭円形土坑・小型の隅丸方形土坑を検出した。これら遺構の掘削のち4月14日にII区の全景写真、のち個別写真・図面の記録作業を完了し、4月25日に埋め戻し、II区の調査を完了した。

III区は南西側の約50m²の区画である。平成29年4月25～26日に表土を除去。表土除去後、調査担当の服部は埋蔵文化財センター異動となり、以後この区画の調査は後任の加藤隆也が行った。この区画もI・II区同様現代の搅乱著しかったが、ピット・椭円形土坑・井戸等を検出。掘削のち4月28日にIII区の全景写真、その後個別写真・図面の記録作業を完了し、5月16日に埋め戻しその他撤収作業を完了。以上を以て、本調査を終了した。

本調査区の土層（第4図）は概して地表より140～150cm下までは昭和時代頃の瓦礫が混じる搅乱土である。その下に10cm程度の暗茶褐色砂質土が部分的に残存し、それより下は黄白色砂の地山砂丘である。ともに粘性・しまりはほぼ無い。暗茶褐色砂質土は整地面としてはごく一部のみしか残存しておらず、搅乱による遺構上端の欠失もあって、整地面の区分は不可能であった。そのため、全体の整地面としては1面の調査となっている。また、本報告では検出した遺構の区分種類が少ないとから遺構・遺物は調査の検出番号（欠番はあるが重複しない）順に述べることをまず断っておきたい。暗茶褐色砂質土と地山砂丘との検出面の違いなどは、後述の遺構・遺物の記述でそれぞれ述べる。



第5図 SK0001・0002及び出土遺物(遺構は1/40、遺物は1/3)

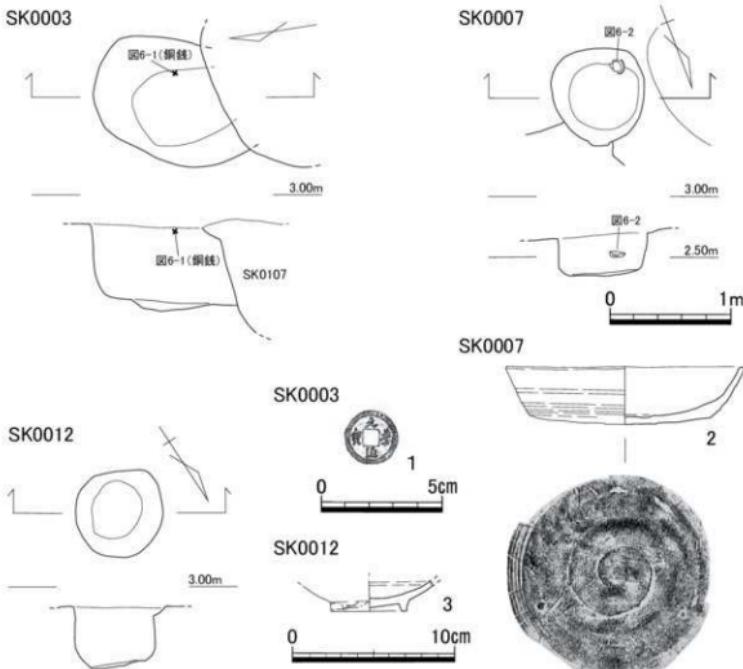
2. 遺構と遺物

本調査ではピット、土坑、井戸等約250基を検出した。遺物は土師器、白磁、青磁、瓦質土器がコンテナケース約15箱分出土している。

I区（調査区東側）

SK0001（第5図左上・図版1-1）

北東側東壁沿いで検出。楕円方形の土坑に橙色混じりの白色粘土が敷き詰められるように埋まっていた。暗茶褐色砂質土上面からの検出だが、上端は削平を受けている可能性が高い。遺物はなく、時期不明。



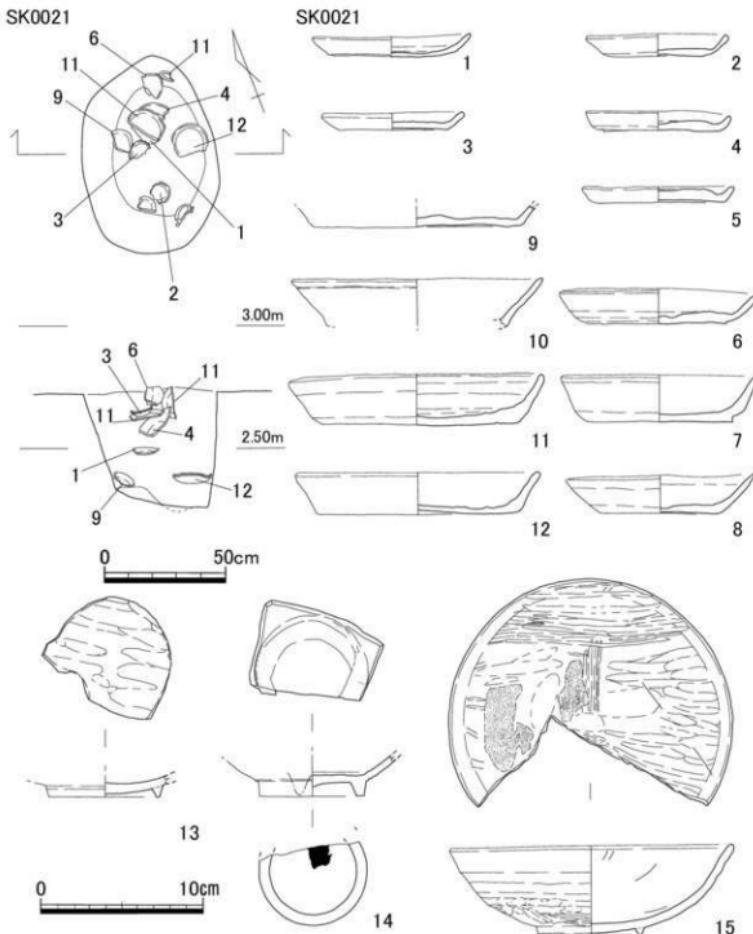
第6図 SK0003・0007・0012及び出土遺物(遺構は1/40、遺物は1が1/2、2～3が1/3)

SK0002 (第5図右上・図版1-2)

中央やや東側暗茶褐色砂質土から検出。長径約110cm、深さ約70cmの土坑。底の中心に径・深さ20cm程度の小穴があったが、本遺構に切られている。時期は13世紀前後～前半頃にかけてと考えられる。出土遺物（第5図1～5・図版2～8）1～3は土師皿。いずれも回転ヘラ切り。4は瓦質の碗で底部付近から高台にかけて1/2が残存。外面・内面にジグザグ方向のミガキが確認できる。5は龍泉窯系青磁碗。口縁部および付近が一部欠損するが、比較的良好な残存である。外面は幅2cm前後単位での鎬連弁門、内面は無紋である。

SK0003 (第6図左上)

北東側東壁付近、暗茶褐色砂質土から検出。SK0001、SE0107に切られる。上部より宋銭が出土。他の遺物は部位不明の土師器、瓦器、青磁の小片で占める。青磁はジグザグ方向の擣列点とみられる青磁小片を2点含む。時期は12世紀中頃～後半か。出土遺物（第6図1）1は銅錢。元豐通宝（初鑄1078年）。



第7図 SK0021及び出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/3)

SK0007 (第6図右上・図版1-3)

東壁付近暗茶褐色砂質土から検出。SK0002の東に隣接する。径75.0~80.0cm、深さ30.0cm程度の土坑。遺物はポリ袋1袋分と多くなく、小片が占める。底部ヘラ切り、糸切りが混在する土師器片の他、部位不明の白磁小片が2片出土。出土遺物(第6図2)2は土師器壊。口縁~体部にかけて1/3程度、底部はほぼ完形で残存。復元径は14.4cm、高さ3.5cm程度。底部は回転ヘラ切り。

SK0012 (第6図左下)

中央やや北寄りにて暗茶褐色砂質土から検出。径70.0~70.5、深さ45.0cm程度の円形土坑。遺物は部位不明土師器、瓦器といった小片がボリ袋1袋分出土。出土遺物（第6図3）3は白磁の高台部。高台の径4.8cm、高さ8mm程度の小碗。内面見込み付近に1条の沈線が巡る。

SK0021 (第7図・図版1~4)

中央やや北東寄り暗茶褐色砂質土から検出。長径81cm、短径55cm、深さ50cm程度の土坑である。土師器の皿などが多く出土しているが、出土位置は規則的でない。時期は13世紀後半~14世紀前後頃か。出土遺物（第7図1~15・図版3~1）1~5は土師皿。いずれも径9~10cm程度で底部糸切り。6~12は壊。いずれも1/3~1/2残存の破片であるが、復元から6~8は径12.0cm、10~12は径15.0cm前後、高さは6、8が2.0cm、7、10~12が3.0cm前後で底

部糸切り。10は底部口縁~体部にかけて1/3程度残存する破片であり、底部は欠失。13は瓦器。焼成は極めて甘く、にぶい灰白色を呈する。高台部3/4程度のみの残存。平行方向に不連続のミガキを施す。ミガキの幅は0.5~1.2cmと大きい。14は白磁。にぶい灰白色を呈する。底部~高台にかけて2/3程度が残存する破片である。高台径6.5cm程度。内面見込みの軸を環状に搔き取っている。外面は一部軸が上部からかかる部分もあるが、高台は施釉されていない。15は瓦質の碗。焼成はやや甘い。外面は回転ナデのち体部下半において不定方向のミガキ、指頭圧痕を呈する。内面は不定間隔にコテあて痕が残っており、全面に平行方向のミガキを施す。内面底部付近は製作時の指頭圧痕によりミガキが一部消えるほか、埋没時砂などによる磨滅を受けている。

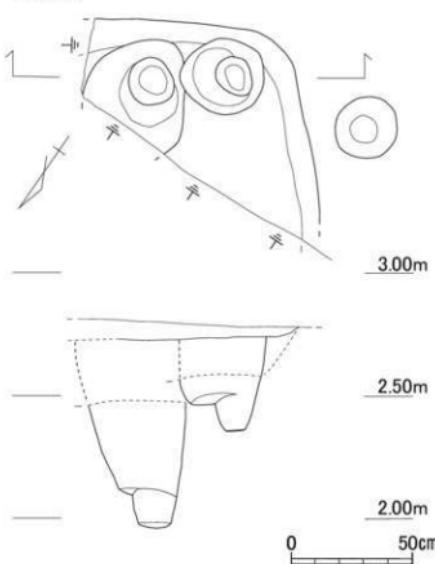
SK0055 (第8図・図版1~5)

中央やや南西寄り。暗茶褐色砂質土上面から検出。北側を昭和時代の搅乱により失っているため、全形は不明であるが、隅丸の方形状であった可能性がある。角付近に2基のビットが検出され、方形状の建物跡であった可能性もある。遺物は土坑・ビットとともに器種不明の土師器、瓦、青磁といった小片が15点ほどであり、明確な時期は特定できない。

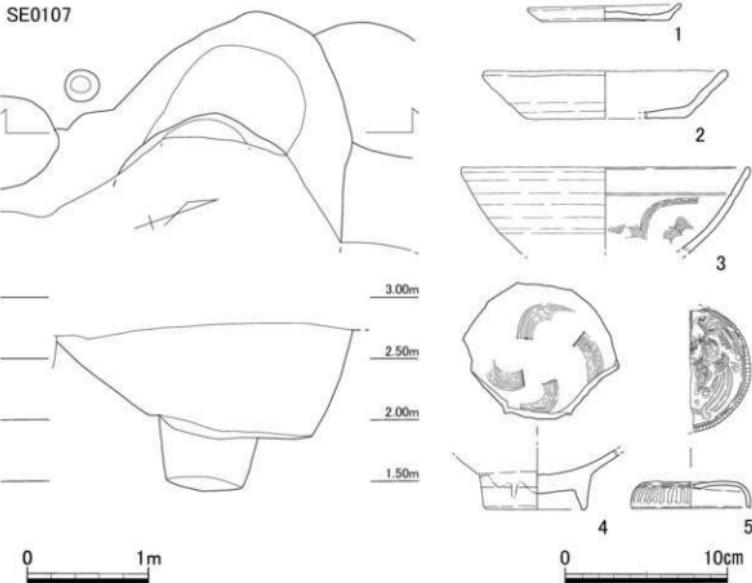
SE0107 (第9図左・図版1~6)

北東側東壁沿いにて出土。暗茶褐色砂質土から検出。SK0001に切られ、SK0003を切る。遺構西側

SK0055



第8図 SK0055(1/20)



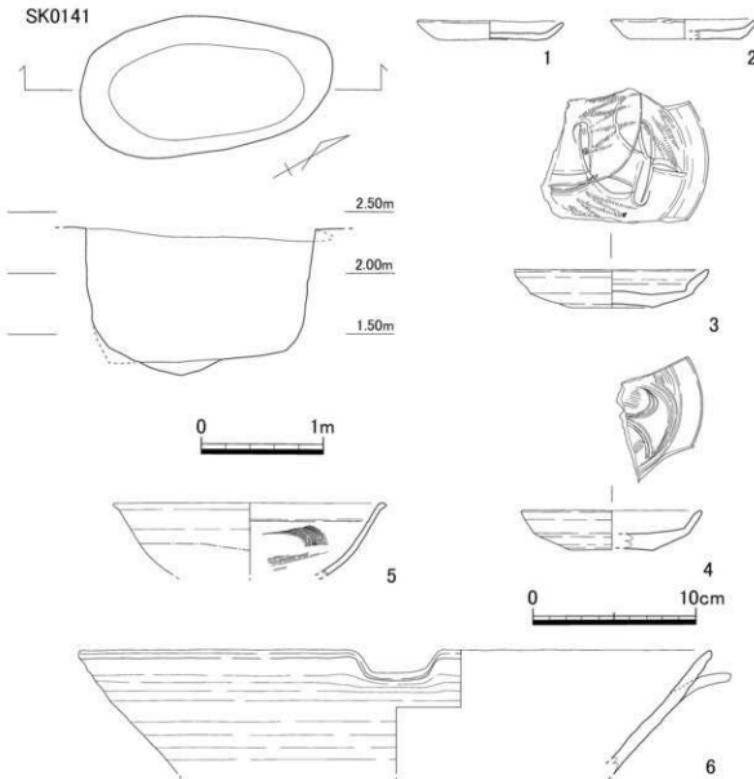
第9図 SE0107及び出土遺物(遺構は1/40、遺物は1/3)

のみの検出・掘削のため全形は不明であるが、外堀で100cm、内堀で50cm以上掘り込まれており、内堀は調査区外にかけてさらに掘り下がると考えられる形状から、井戸と判断した。遺物は土師皿や陶磁器小片が出土している。時期は12世紀中～後半頃か。出土遺物（第9図1～5・図版3-2）1・2はともに内堀最下層より出土。1は土師器小皿。径9.4cm、0高さ1.0cm前後。底部糸切り。2は土師器壺で径15.2cm、高さ3.0cm。底部糸切り。3～5は外堀からの出土。3、4はともに白磁碗。短い飾目で文様を描く。3は口縁～体部の破片であり、口縁下内面に1条の沈線が巡る。復元径17.5cm程度。4は底部～高台部の残存で高台の径6.4cm、高さ1.2cmを測る。V類か。5は白磁の合子蓋。天井部から底部にかけて1/2の残存。外面天井部は鳳凰文の浮き彫り、体部はおよそ2mm間隔で幅2mm級の彫込みを巡らす。青灰色施釉の後、口縁付近の釉を搔き落としている。内面は天井部に回転ヘラ削りの痕跡あり。にぶい灰白色の施釉のち、口縁部側の釉を搔き落としている。

II区（調査区北西側）

SK0141（第10図左上）

地山砂丘土から検出したが、上端は削平のため不明。短径110cm、長径210cm、深さ最深110cmを測る椭円形土坑である。時期は12世紀中頃～後半頃か。出土遺物（第10図1～6）1～2は土師皿。共に内堀の最下部付近で出土しており、底部糸切り。2は口縁～底部にかけての破片。3～4は青磁皿。3は同安窯系。底部を除く全面に施釉。内面にヘラ書き文、ジグザグ状の飾目点文を持つ。4は龍泉窯系。底部を除いて全面に施釉。内面に放射状のヘラ書き文を施す。5は白磁の碗。灰白色を呈す

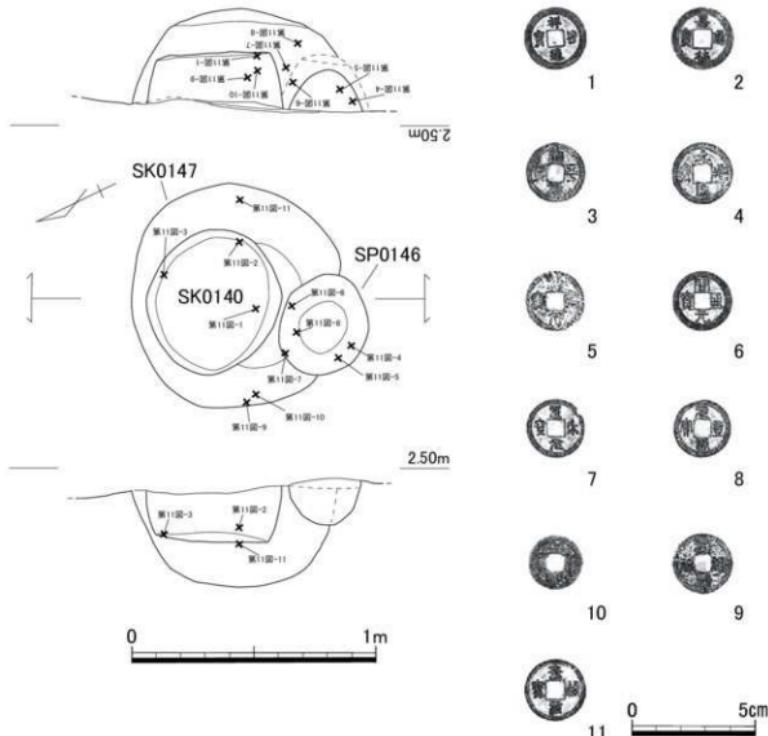


第10図 SK0141及び出土遺物(遺構は1/40、遺物は1/3)

る。口縁～底部にかけて残存。復元径は16.8cm程度。短い櫛目で文様を描く。6は捏ね鉢。口縁から体部にかけての小片である。わずかな屈曲を基に復元した径は39.0cm程度。色調は鈍い暗灰色を呈する。

SK0140・SP0146・SK0147 (第11図左・図版1-8、2-1、2-2)

地山砂丘土から検出。これらの遺構はいずれも上部が現代搅乱による削平を受け不明確な部分が多く、切りあいも複雑であるため遺構本来の形状は不明。遺物は土器がSK0140から器種不明土器、白磁の小片20点前後の出土に対し、銅鏡がSK0140で3点、SP0146で5点、SK0147で3点と密に出土している。この3つの遺構の時期について、まず遺構の切合関係からSK0147のちにSK0140またはSP0146と続く。遺構から出土した銅鏡は判読が困難なものもあったが1-2、4、7-8、11といず

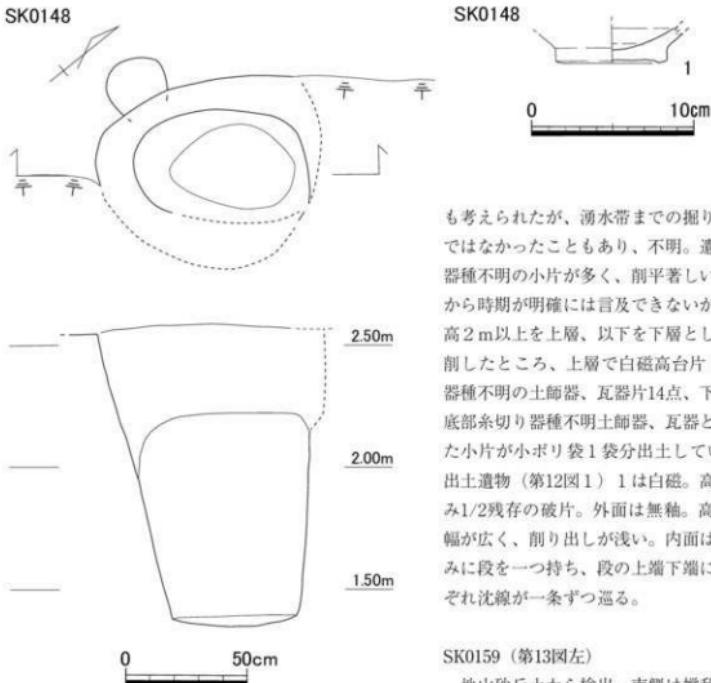


第11図 SK0140・SP0146・SK0147及び出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/2)

れも北宋銭であり、時期は少なくともSK0147が1034年以降、SP0146が1101年以降、SK0140が1064年以降であるといえよう。出土遺物（第11図1～11）1～3はSK0140、4～8はSP0146、9～11はSK0147から出土した銅銭である。1は祥符通宝（初鑄1099年）。2は嘉祐通宝（初鑄1056年）。3は表面の腐食のため、文字の判読困難。ただし篆字で□平□□とあり、可能性としては治平元宝（初鑄1064年）が考えられる。4は元豐通宝（初鑄1078年）。5は表面の腐食のため、文字の判読困難。6は唐銭。開元通宝（初鑄621年）。7は篆字のため判断が難しいが、聖宋元宝（初鑄1101年）と考えられる。8は篆字で元豐通宝（初鑄1078年）である。9・10は共に腐食のため文字の判読不可能。11は篆字の景祐元宝（初鑄1034年）と考えられる。

SK0148（第12図、図版2-3）

地山砂丘土から検出。周囲がポンプ式現代井戸による搅乱を受けていたため、上面が大きく切られている。残存する土坑は検出面の標高が2.60m前後に対し、底部は1.40m以下と深く、井戸の内堀と



第12図 SK0148及び出土遺物
(遺構は1/20、遺物は1/3)

面を精査したところ2つは別遺構であると分かった。時期は12世紀後半～13世紀初頭頃か。出土遺物(第13図1～3)1は土師皿。底部は糸切り。ほぼ完形で残存。2～3は楠葉型瓦器碗。共に緩やかに内湾する体部から口縁付近で直立し、口縁内端部はやや不明瞭ではあるが段を持つ。外面体部において、2は上半1/2～1/3、3は上半1/2の部分に、それぞれジグザグ状に分割したヘラミガキを施す。また、共に内面において口縁部平行方向に圓線状のヘラミガキを密に施す。幅1mm程度のヘラミガキが一単位1～2cm幅で密に巡らされているが、単位の間には隙間がみられる。

Ⅲ区(調査区南西側)

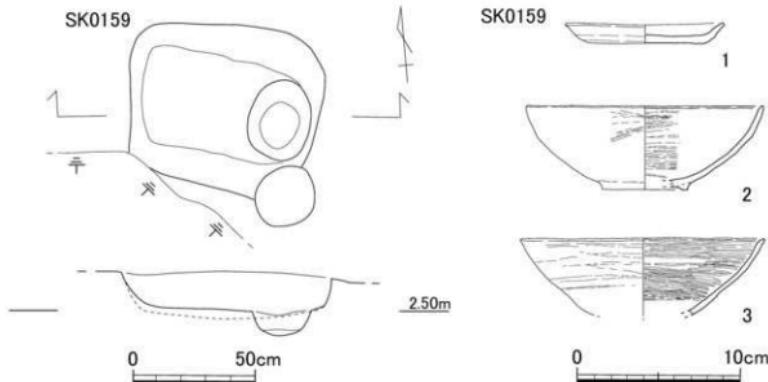
SK0213(第14図左)

この土坑からは土師皿およびその小片でほぼ占めるが、部位不明の白磁、青磁、瓦器片も数点散見された。土師器は土坑の上面に集中しており、土坑がある程度埋まり、上端まで埋まらず窪み状になっている段階で重ねた状態で据え置かれたものと考えられる。土師器の出土状況は、法量の大きい杯が下に2点重なり、その上に小皿が3枚重なるという部分があるなど、ある程度規則的に置かれていた

も考えられたが、湧水帯までの掘り込みではなかったこともあり、不明。遺物は器種不明の小片が多く、削平著しいことから時期が明確には言及できないが、標高2m以上を上層、以下を下層として掘削したところ、上層で白磁高台片1点、器種不明の土師器、瓦器片14点、下層で底部糸切り器種不明土師器、瓦器といった小片が小ぶり袋1袋分出土している。出土遺物(第12図1)1は白磁。高台のみ1/2残存の破片。外面は無釉。高台は幅が広く、削り出しが浅い。内面は見込みに段を持つ、段の上端下端にそれぞれ沈線が一条ずつ巡る。

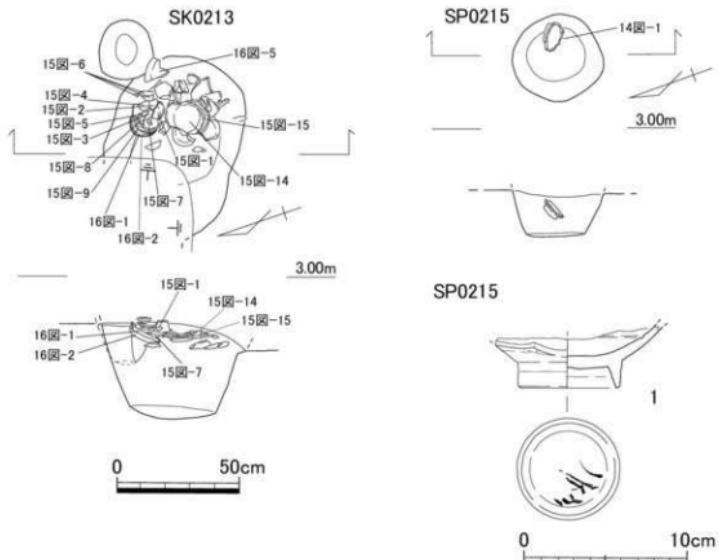
SK0159(第13図左)

地山砂丘土から検出。南側は搅乱により切られる。隅丸方形状であり、遺構の性格は不明。土坑底から検出したピットと併せて柱穴とも思われたが、半蔵後断



第13図 SK0159及び出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/3)

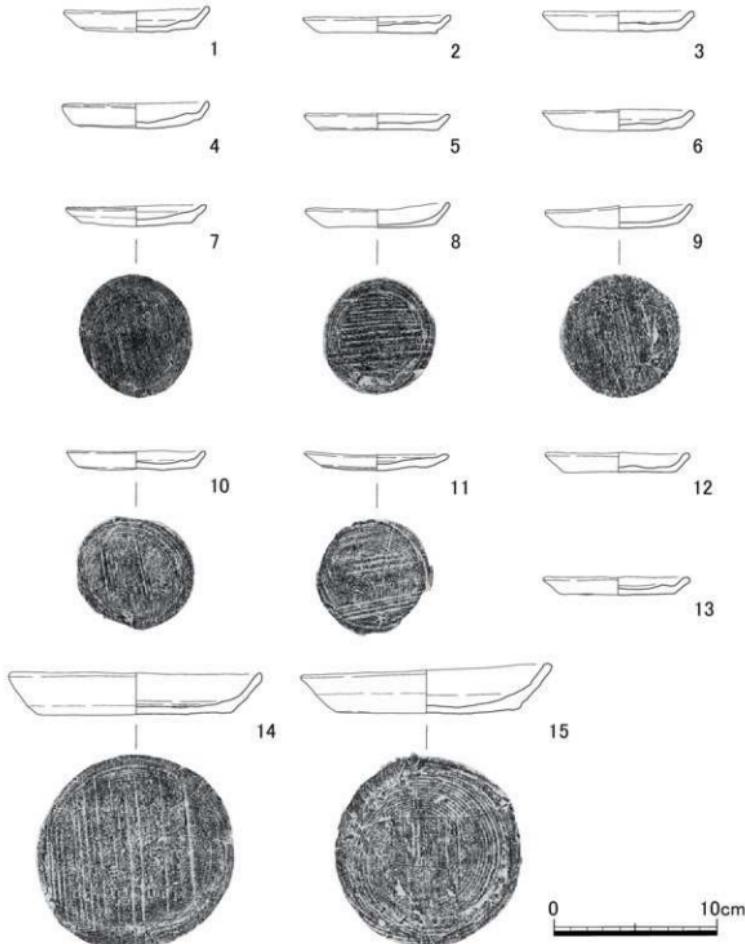
ことが考えられるが、一方で重なる壺の下から小皿が検出するなど不規則な箇所もあり、埋納というよりは土坑廃棄の性格が強いように考えられる。詳細は後述するが土師器の底面はいずれも糸切り。法量は壺で径15.5cm、高さ2.5cm前後、小皿は径9cm、高さ1cm前後のものが多い。時期は12世紀後半頃と考えられる。出土遺物（第15図1～15、第16図1～5）1～13は底部糸切りの土師器皿。12を除くすべての外底に板状の圧痕が確認できる。1は口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形で残存。径9.0cm、高さ1.2cmを測る。2は口縁部1/4、底部1/2程度の残存で復元径9.0cm、高さ1.0cmを測る。3は1/2程度の残存。復元径9.4cm、高さ1.2cmを測る。4は接合後、口縁部一部欠失するがほぼ完形。径9.0cm、高さ1.5cmを測る。5は1/3程度の残存。復元径9.0cm、高さ1.0cmを測る。6は1/2程度の残存で復元径9.2cm、高さ1.2cmを測る。7は完形。径8.8cm、高さ1.2cmを測る。8は接合後完形。径9.0cm、高さ1.0cmを測る。9は接合後完形。径9.0cm、高さ1.2cmを測る。内面見込み部に一方向のナデ顯著。10は完形で径8.3cm、高さ1.0cmを測る。11は口縁～体部が2/3程度、底部完形で残存。復元径9.0cm、高さ1.0cmを測る。12は完形。径8.9cm、高さ1.1cmの残存。13は完形。径9.4cm、高さ1.0cmを測る。14～15は底部糸切りの壺で、外底に板状圧痕あり。14は口縁部1/3、底部1/1の残存。径15.6cm、高さ2.5cmを測る。15は口縁～体部1/3、底部完形で残存。復元径15.4cm、高さ2.6cmを測る。第16図1～4は底部糸切りの土師器壺。1～2は完形でともに板状圧痕あり。1は径14.7cm、高さ2.6cm、2は径15.8cm、高さ2.6cmを測る。3は1/2程度の残存で復元径14.8cm、高さ2.2cmを測る。底面には短径6mm、長径8mm程度のいびつな穿孔が確認できる。外底は磨滅気味だが、糸切りと板状圧痕が確認できる。4は口縁～底部外縁側付近にかけて1/3程度の破片で復元径14.8cm、高さ2.6cmを測る。5は口縁～底部外縁側付近にかけて1/3程度の破片で復元径15.8cm、高さ2.5cm。底部は多くが欠失しており、詳細不明。



第14図 SK0213・SP0215及びSP0215出土遺物(遺構は1/20、遺物は1/3)

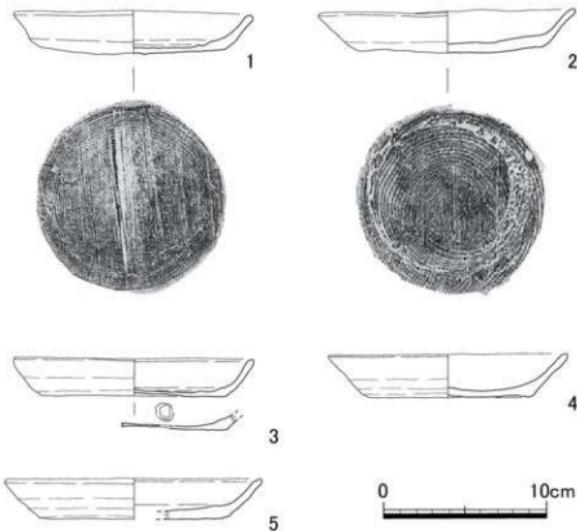
SK0214 (第17図左上)

2区と3区をほぼ半分ずつまたぐ形で検出したため、北半と南半で反転する形での掘削となった。時期は12世紀中～後半頃か。出土遺物（第17図1～10・図版3-3、3-4・第18図1～6・図版4-1）第17図1は土師皿。II区側下層からの出土。底部は糸切り。2は土師器杯。III区側下層より出土。口縁部～体部は1/4、底部は1/2程度の残存。復元径は15.2cm、高さ3cm程度。底部は糸切り。3は白磁碗。II区側上層から出土。口縁は直口で体部は鈍角に内湾する。体部から底部にかけて一気に屈曲しており、内面見込み周辺に2条の沈線を巡らす他、見込みにはヘラ書きで草花文を施す。皿Ⅷ類か。4は白磁碗。II区側上層から出土。口縁片で径は復元できない。内面口縁下に一条の沈線を巡らす。皿もしくは小碗と考えられる。5は龍泉窯系青磁碗。III区側からの出土。口縁～体部にかけて破片で1/6程度の残存。口縁端部はわずかながら外反する。体部下位につれ器厚が厚くなる。釉は深い緑灰色を呈する。内面は片彫りの蓮花文を施す。I類。6は青磁碗の高台。II区側上層から出土。内面体部と見込みの境界部に沈線を巡らせ、見込みには螺旋状の片彫りを施す。内面は施釉、外面は無釉である。遊具などへの転用品か。7は龍泉窯系青磁碗。III区側からの出土。口縁～体部にかけて破片で1/8程度の残存。口縁端部はわずかながら外反、体部下位につれ器厚が厚くなる。内面は片彫りの葉文が施される。I類。8は白磁碗か。III区側からの出土。口縁は消失し、底部付近～高台にかけての残存である。高台は完形。外面は残存する体部の上端わずかに施釉が認められ、以下は釉を搔き落としたと考えられる。外腹腰には1本当たり3～5mm幅の片彫り沈線が3～4本単位で縱方向に施されるほか、底部は高台裏の断面が下向砲弾形状になるように削り取られている。内面は施釉され



第15図 SK0213出土遺物①(1/3)

るが、一部底面に及ばない部分があるなど、丁寧とは言えない。焼成がかなり甘く、胎土は全体的に赤橙色を呈する。また外面の腰付近に一か所、高台裏に一か所ずつ墨書が認められたが、判読不可能。9は白磁碗。Ⅱ区側下層から出土。底部付近の一部および高台が完形で残存。高台は削り出しであり、外面体部との境界にはヘラ搔きによる段あり。また高台裏に墨書が施される。磨滅によりわかりにくいか、確認する限りでは中央右に「十」と「内」の二文字、中央下に「中」の一文字ととれる。



第16図 SK0213出土遺物②(1/3)

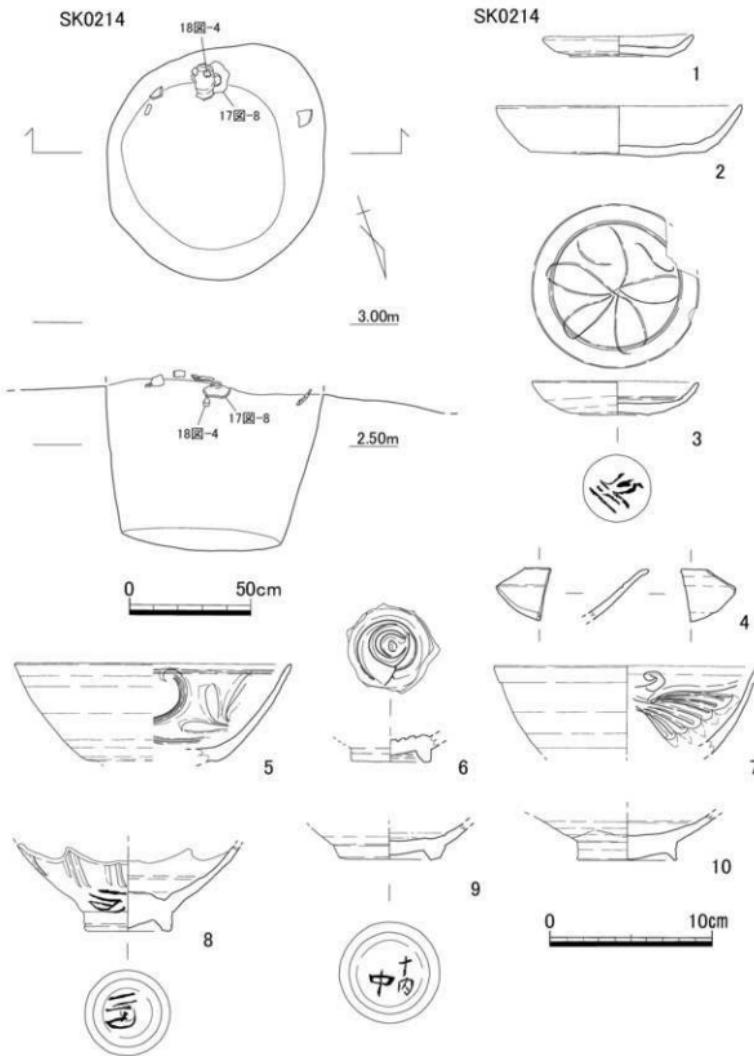
内面見込みの釉を環状に搔きとる。VII類。10は白磁碗。III区側からの出土。内面体部と見込みの境界部に沈線を巡らす。図18-1は同安窯系青磁碗。II区側下層から出土。I類。2はII区側上層から出土。白磁耳付き壺の頭部。耳の外面に2本のヘラ搔き沈線。内面上面に短い櫛搔きの痕跡あり。3はIII区側上層からの出土。青磁の小型合子壺。4は土鉤。III区側からの出土。球状の土玉を径4mm程度の穿孔を施し、孔の両端を緊縛部とみられる一条の沈線が半球状に巡る。5は土製の管玉。III区側からの出土。6は滑石製石鍋。口縁は一部を除き欠失。III区側からの出土。体部の曲線からの復元径29~30cm程度。外面把手下に縦方向のケズリ痕あり。

SP0215（第14図右）

III区中央から検出し、南にはSX0249が所在する。径37cm、深さ18cm程度残存するピット。V類の白磁碗1点のみの出土である。時期は12世紀中頃~12世紀後半か。出土遺物（第14図1）1は白磁碗。口縁部~体部は消失し、高台は完形で残存する。高台は細く直立しており、釉は体部の腰付近までの施釉だが、一部高台までかかる。胎土は黄土のかかる灰白色であり、焼成は甘い。釉は色が純くくすみ、彩度が低く光沢がない。大きさ0.1mm程度の気泡による孔がまばらにみられる。高台裏に墨書きと思しき痕跡が見受けられるが、磨滅のため判読できない。

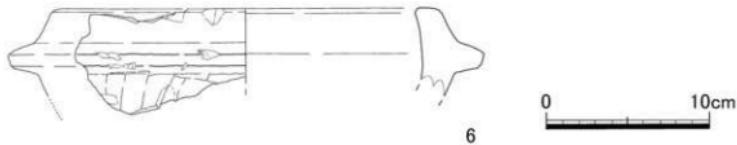
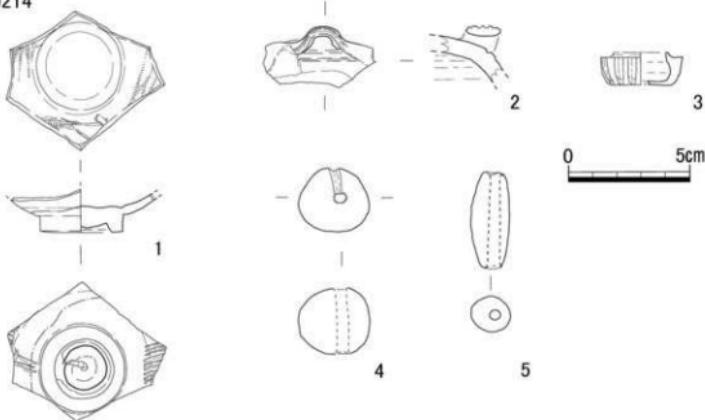
SX0216

II区・III区側において、搅乱土を含むが整地層との境界が不明瞭であり、埋土の状態が一定しない区域をSX0216とした。搅乱と埋没有機物のシミによるものとみられる。小型コンテナケース1箱分

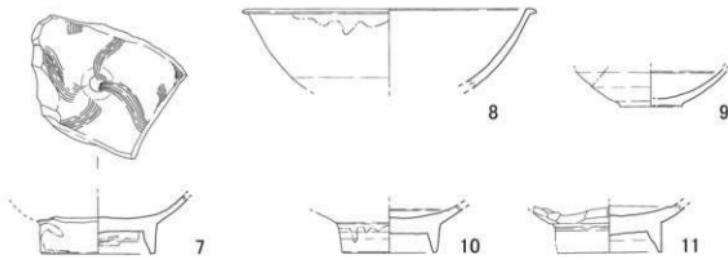


第17図 SK0214及び出土遺物①(遺構は1/20、遺物は1/3)

SK0214



SX0216



第18図 SK0214出土遺物②及びSX0216出土遺物(1・6～11は1/3、2～5は1/2)

の土師器、瓦器、陶磁器片が出土しており、器形が復元できるものを図化した。出土遺物（第18図7～11）第17図7は白磁碗。口縁部～体部はほぼ欠失。高台は完形で残存しており、細く高く直立する。内面に短い櫛目で花文を描く。V類。8は白磁碗。口縁～体部の破片。1/5程度の残存。復元径は18cm程度。胎土は黄土のかかる灰白色であり、焼成は甘い。釉は色が鈍くすみ、彩度が低く光沢がない。9は青磁。底部1/2程度の残存。器種は小碗または皿か。内面は見込み周縁に段状の沈線を上下二条巡らせる。10～11は白磁碗。共に高台は細く直立しており、釉は体部の腰付近までの施釉だが、一部高台までかかる。10は口縁部～体部はほぼ欠失し、1/2程度の残存。見込みの周りに一条の沈線を巡らす。11は口縁部～体部はほぼ欠失し、高台は一部欠損の状態で残存。見込みの周りに一条の沈線を巡らす。

SX0217（第19図）

Ⅲ区西側南壁沿いにて一部を検出したが、大半は南側調査区外に統くとみられ、全形は不明。SE248を切る。出土遺物（第19図1～4・図版4-2）第19図1は白磁皿。底部外面はわずかに抉る。内面体部と見込み部の境界が段をなして屈曲する。2は土玉。法量は長さ2.8cm、中央断面径9mm、うち内孔径4mm程度を測る。色調は灰色に一部灰褐色が混じる。焼成は甘く、胎土はキメの細かい粘土ではば占める。3は不明石片。石材的には軟質で光沢がみられることから滑石と考えられる。白色混じりの赤橙色を呈し、被熱しているのか一部器面に褐色の斑がみられる。表面縁側には横方向、次いで斜め方向に鋭利な切り傷が集中しており、石材加工途上の未製品とも考えられる。4は銅鏡だが、鏡による腐食著しく、文字の判読不能。

SE0248

Ⅲ区西側南壁沿いにて検出。平面及び断面は第4図参照。半円状であり南側調査区外に統くことから、円形の井戸と考えられる。標高1.1mまで掘削したが、下端は検出されておらず、南の調査区外にかけて下がっていくと考えられる。遺構の時期は13世紀後半～14世紀前半ごろと考えられる。出土遺物（第19図5～9・図版4-3、4-4）小型コンテナケース1箱分の土師器、瓦器、陶磁器片が出土しており、器形が復元できるものを図化した。第19図5は土師器壺。下層から出土。一部口縁が欠失している以外は完形で残存。底部は糸切りの後板状當て具痕あり。6は白磁碗。口縁～体部の小片。屈曲からの復元径は14.6cm程度。口縁部周辺は施釉後釉を搔きとつておらず、口禿げ。7は土師器小片。部位は不明だが、扁平であることから底部と考えられる。一面墨書きあり。小片のため文字全体が把握できず、判読不可能。8は規片。揚げ側の一角のみの残存で、裏面は欠失している。全体は方形形状であったと考えられる。縁に沿って沈線、隅には連弧文を二条施す。9は開元通宝（初鑄621年）。

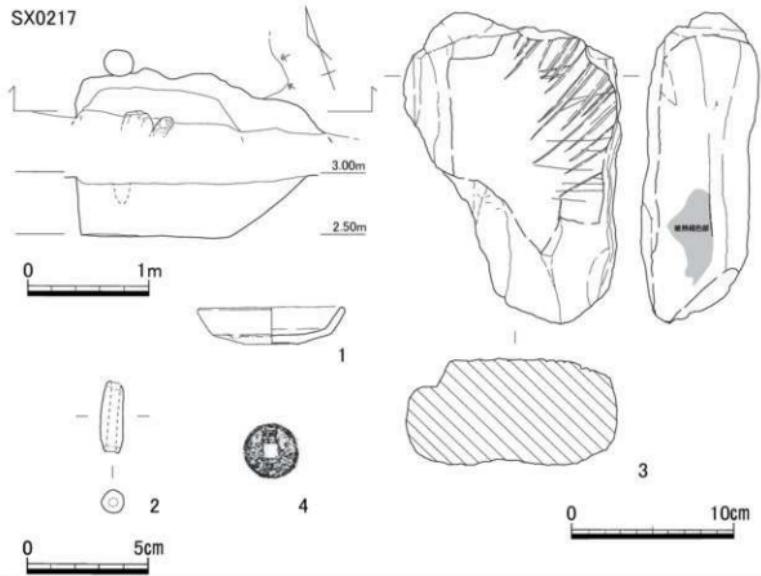
SX0249

小型コンテナケース1箱分の陶磁器、土師器片が出土しているが、埋土中に近現代の陶器が混入していたため、現代の攪乱と判断した。出土遺物（第19図10）10は北宋錢。篆字で元祐通宝（初鑄1086年）である。

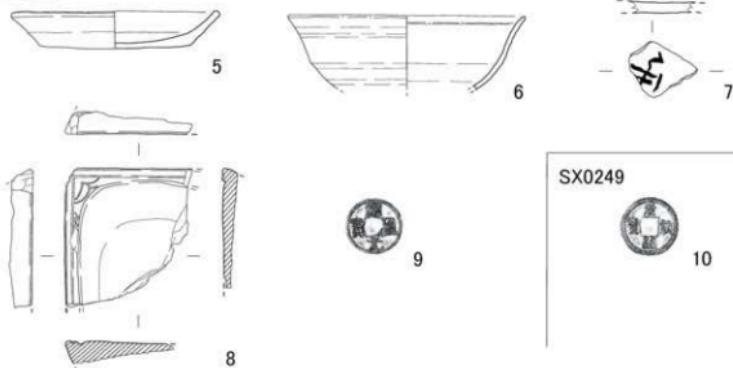
その他の出土遺物（第20図1～15、第21図1～3）

第20図1～2はI区暗茶褐色砂質土層中より出土した底部糸切りの土師皿。1は1/2程度の残存、2は完形で、内面に環状の指ナデ痕、底部に板状のあて具痕が顕著。3～5は土師器杯。共に口縁～

SX0217

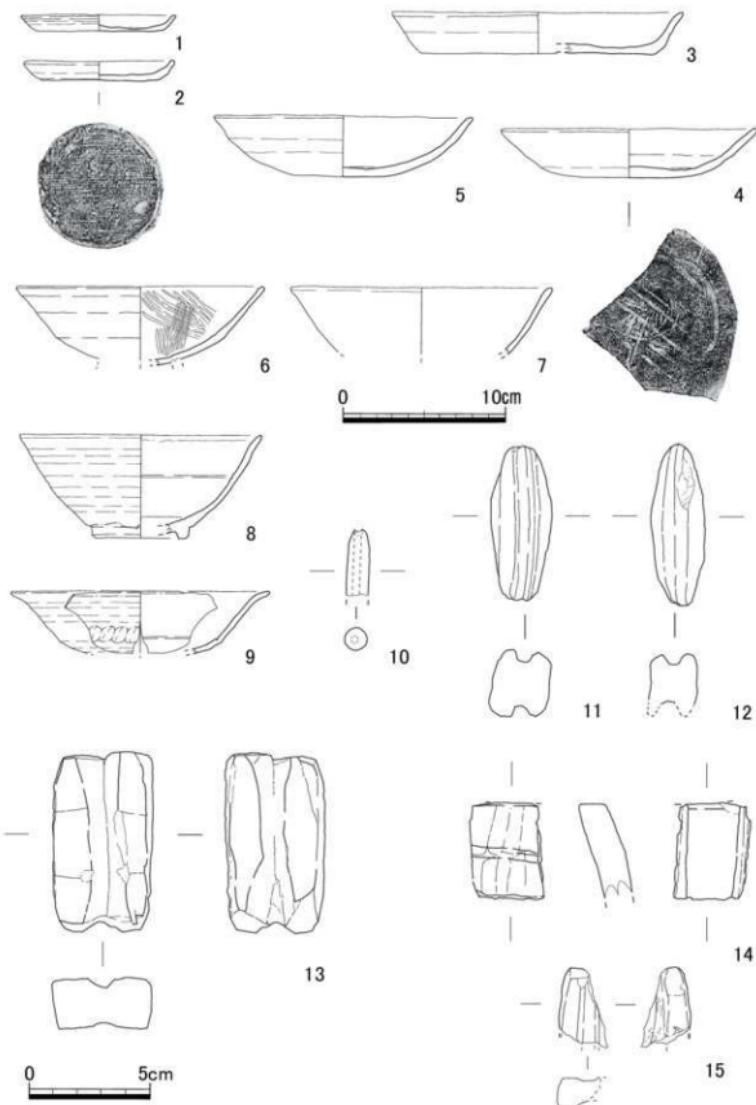


SE0248

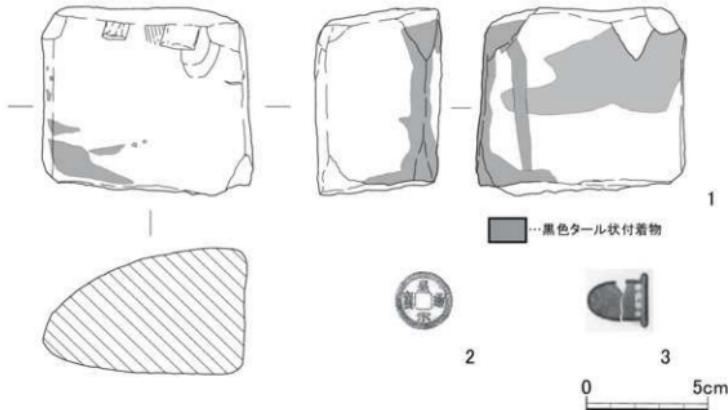


第19図 SX0217及びSX0217(1~4)、SE0248(5~9)、SX0249(10)出土遺物
(遺構は1/40、1・3・5・6は1/3、2・4・7~10は1/2)

底部にかけての破片で I 区暗茶褐色砂質土層下層より出土。6は I 区小穴より出土の瓦器碗。口縁～体部にかけて1/6～1/4程度の破片。底部には貼付高台の痕跡あり。器面特に外面で胎土の剥落による孔があるなど状態は良くない。外面はヘラによる粗いナデ跡が巡り、内面には口縁付近でジグザグ状とみられるミガキが微かに認められるが、その後複数方向からのミガキが複数方向施されている。体部腰側に棱線があり、鈍角に屈曲する。7は I 区暗茶褐色砂質土層中より出土。口縁～体部にかけての破片。器形が陶磁器碗に似るが、無釉である。鈍い灰白色を呈しており、焼成は良好。8は白磁碗。表土除去直後の暗茶褐色砂質土検出中に出土。口縁～高台の一部にかけて残存。復元径14.8cm程度。口縁部周辺は施釉後釉を搔きとめており、口禿げ。9は I 区暗茶褐色砂質土層中より出土。白磁の浅碗か。口縁～体部の小片。屈曲からの復元径15.8cm程度。口縁部周辺は施釉後釉を搔きとめており、口禿げ。体部に斜方向に指などによる緩い刻みあり。10は III 区東側暗茶褐色砂質土層上部出土の土製管玉片。表面は黒褐色を呈する。径2～3mm程度の孔あり。11～12は土錘。共に I 区暗茶褐色砂質土層下層からの出土であり、手づくねによる成形。形がいびつでナデも粗い。実用品としての性格が強い。13は滑石製の石錘。滑石製石鍋体部の転用品とみられ、体部下位につれ器厚が厚くなる。III 区東側暗茶褐色砂質土層上部での出土。14は I 区暗茶褐色砂質土層下層より出土の板状滑石片。滑石製石鍋体部からの転用材か。長辺両側には器面に板チョコ断面状の溝が彫られており、材を折りやすくしていたとみられる。15は不明滑石製品片。I 区の時期不明小穴より出土。石鍋の転用品か。厚さ1.2～1.3cmの板状の滑石の両面に上端8mm幅、下端4～5mm幅の沈線が施される。石錘片か。第21図1は砥石か。下部は破断面であるが、転用の際に切断した面ともとれる。材質は砂岩状。全ての面において黒色タール状の付着物が不定形範囲で確認でき、被熱の可能性がある。I 区暗茶褐色砂質土層中より出土。2～3は廃土中から発見したものである。2は北宋錢。皇宋通宝（初鑄1039年）。3は足袋のコハゼか。表面の腐食著しく、形状復元は困難なためエックス線で透過撮影したものを掲載した。腐食は青緑～褐色を呈しており、材質は銅と考えられる。正確な形状のサイズは不明であるが、現状では長幅1.5～1.7cm、短幅で1.2～1.5cm程度である。



第20図 その他の出土遺物実測図①(1~9は1/3、10~15は1/2)



第21図 その他の出土遺物実測図②(1~2は1/2、3は縮尺任意)

IV まとめ

以上、主な出土遺構および遺物を述べてきた。成果を簡単にではあるがまとめる。

遺構について、本調査では生活遺構と思われるピット・土坑・井戸を検出しており、これらは大きく3つの時期のものに分かれる。

- ① 11世紀後半～12世紀前半にかけての土坑
- ② 12世紀後半～13世紀前半にかけての土坑、井戸
- ③ 13世紀後半～14世紀前半にかけての土坑、井戸

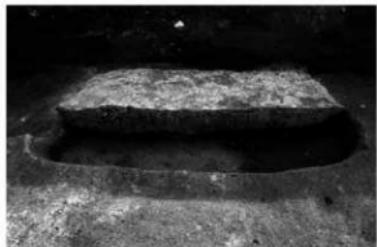
本調査区では11世紀後半頃から14世紀前半まで継続的に生活域として使用していたことがわかる。もっとも、本調査区より約50m西の第21次調査区中央では、12世紀後半～13世紀前半にかけて土壙墓・木棺墓5基が近接して確認されているなど、箱崎遺跡北側一帯は生活域や墓地等といった土地利用にあたっては、さほど厳密な区分けは行われていなかった可能性も指摘されている（中尾2018）。

土層については、今回、周辺の調査区で広域的に確認されている13世紀後半代の焼土層は確認されなかつた。搅乱で消失したためと考えられるが、この搅乱は調査区全体が調査直前まで住宅地であつたためのものであり、調査区周囲には焦土層を含め、整地面が良好な状態で残存している可能性が高い。そのため、今後周囲の調査では注意を要する。

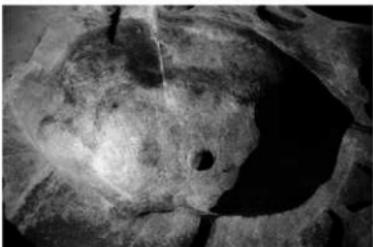
地山直上の暗茶褐色砂質土については、先述の通り昭和時代の搅乱著しく、多くが削平されている。検出した遺構も、標高2.5～3.0mの間で振れ幅があるなど、検出面として時期的に明確な評価はできない。ただし直上の暗茶褐色砂質土の残存部分はⅢ区西側部分での標高が3.0～3.5m付近に分布する部分もあり、本調査区および周囲の地山砂丘面の標高は3mが一つの指標ではないかと考えられる。

【参考文献】

中尾祐太2018「考古学から見た箱崎と博多湾」『九州史学』第180号 九州史学研究会



1 SK0001南北半裁断面(西から)



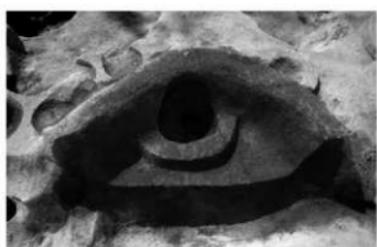
2 SK0002(南から)



3 SK0007(北から)



4 SK0021(南から)



5 SK0055(北から)



6 SE0107(南西から)



7 1区全景(西から)

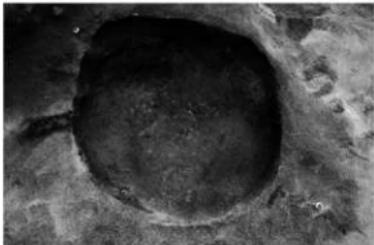


8 SK0140(北西から)

図版2



1 SP0146(東から)



2 SK0147(北東から)



3 SK0148(東から)



4 2区全景(東から)



5 SK0213(西から)



6 SK0214(3区側)(南から)



7 3区全景(東から)

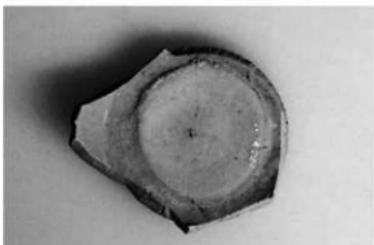


8 SK0002出土青磁(第5図-5)



1 SK0021出土瓦器碗(第7図-15)

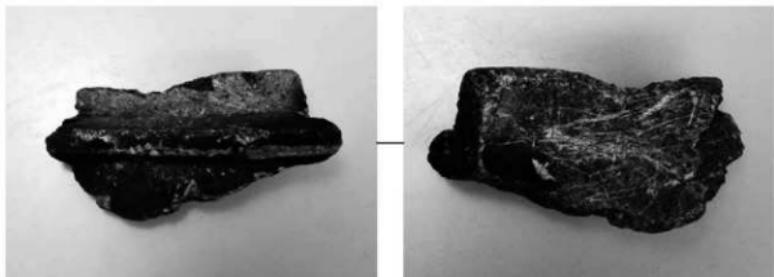
2 SE0107出土白磁合子蓋(第9図-5)



3 SK0214出土墨書き入り白磁(第17図-8)

4 SK0214出土墨書き入り白磁(第17図-9)

図版4



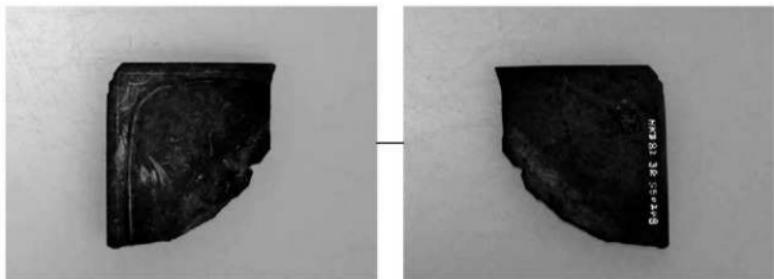
図版4 1 SK0214出土滑石製石鍋片(第18図-6)



2 SX0217出土不明石製品(第19図-3)



3 SE0248出土墨書き入り土師器片(第19図-7)



4 SE0248出土石製硯(第19図-8)

報 告 書 抄 錄

箱崎 57

— 箱崎遺跡第82次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1372集

2019年（平成31年）3月25日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20

